
学園黙示録 弱小人間の物語

氏崎しらす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 弱小人間の物語

【Nコード】

N1966Q

【作者名】

氏崎しらす

【あらすじ】

僕はとても弱い。

大切なモノを、自分で壊してしまっぐらい。

000 プロローグ（前書き）

初めての投稿です。

よろしくお願いします。

000 プロローグ

日常というモノは、実は物凄く脆いのもかもしれない。

いや、そもそも日常をどう定義するかで話は変わってくるんだけど、ここでは置いていて。

とりあえず日常を普段の生活と定義しよう。

朝、眠い目を擦りながら学校、もしくは会社に行き、学業や仕事を夕方までこなし、帰宅する。その後は自分の好きなことをし、眠くなったら寝る。

人間の大体が、多少の差異はあるけどこんな生活をしてるんじゃないだろうか。

そう。

これこそが日常だと僕は考える。

ありきたりで。

いつも通りの生活。

つまらないと感じる人がいるかもしれないが、僕は正直何の変化も無い生活を望んでいる。

ライトノベルの主人公みたいな事件に巻き込まれるのは勘弁だ。

……こう書くと僕がライトノベルが嫌いだと勘違いされそうだから言っとくが、僕はライトノベルが別に嫌いじゃない。むしろ好きだ。いや、ホントに。

彼ら主人公達は、事件をハッピーエンドで終わらす事ができた“成功者”で。

僕は、事件をハッピーエンドどころかバットエンドを凌駕し、最悪にしてしまった“失敗者”。

だからこそ僕は彼らを心の底から尊敬し、心の裏で莫大な劣等感と醜悪な嫉妬を、心の内に持っている。

……話が脱線した。話題を戻そう。

結局日常というモノは——実は薄氷みたいな物で、それまでは普段通りに歩けてもいきなり氷が割れて落ちるのかもしれない。

『僕の時間が止まったあの日』のように。

『全てが終わってしまった日』のように。

長々と独白に近い事をダラダラと言ってしまったって、結局何を伝えたいのかというと。

永遠に続く日常なんてモノは存在せず、僕達が妄信している日常は。

不条理で。

理不尽で。

理解不能支離滅裂なこの世界は。

案外簡単に崩壊するという事だ。

000 プロローグ（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
誤字脱字やおかしい所、批判、ご意見、ご感想を一言でもいいのでお待ちしています。

この小説について、少し説明します。

『』は主にこの物語の固有名詞が入ります。

“ ” は重要な部分で、伏線があるかもしれません。

一番重要な事です、

この物語には、たくさんの伏線と裏設定があります。

もちろん分からなくても最後に謎解き編と解説があるので、楽しめると思います。

よろしければ最後までお付き合いを。

ここまで読んで頂き、有難うございました。

001 濁った殺意

僕が私立藤美学園高等部に入学してから、一週間が経った。

授業の終わりを示す鐘が鳴る。

その瞬間、僕は机に突っ伏す。

相変わらず授業という物には、慣れない。そもそも、授業及び勉強が好きではない僕にとって拷問に近い。

約30人が規則正しく並んで、先生の授業を受けるとというのが理解できない。

気持ち悪い。

でも、そんな事を思っても口には出さない。けど、みんな本心ではこう思っているだろう。

勉強なんて嫌いだ！

しかし、勉強が理解できれば格段に楽しくなると聞いた事がある。そこで教科書をペラペラとめくってみる。ちなみに中学の範囲、復習のページだ。

.....。

全然分かんない。

理解不能。意味不明。回答不能の三拍子が揃ってしまった。

高校一年の春でこのレベルは、致命的だと思う。一歩間違えたら、落ちこぼれのレッテルを貼られる事になってしまう。

いや、もう貼られてるのかもしれない。今終わった一時間目の授

業だけで、もう二桁は「わかりません」を連発しているから……。先生には、悪いと思っている。最初の方は怪訝そうな目で見たが、最後の方は哀れむような目だった。「……そうか。分からないか……。放課後、科学準備室に来なさい」とまで、言われたからな……。

放課後補修確定じゃん。

ちなみに僕の担任でもある。名前は六舟ろふね 有都うつというらしい。変な名前だ。

そんな事を考えつつ、僕がいる1-1を見渡す。

見事に僕以外の人達は、休み時間を満喫している。

具体的に言えば。

“今、一人ぼっちなのは僕だけ”

大事な事なので、ルビを振りしました。

なんでそんな中学生日記のような状態になっているかという点。

それはこの学園のシステムに関連する事だ。

難しい事ではない、簡単な事。

それは、この学園が、幼稚園から大学まであるエスカレーター式の学校だからだ。

流石に幼稚園から一緒という人は少ないと思うが、大体中学から一緒の筈だ。

つまり、周りはみんな知らない人達という事態にならないのだ。しかも5クラスしかない。みんな仲良い筈だよ。

じゃあ、僕と同じ境遇の人を探せばいいという人がいるかもしれない。よく聞け。

今年の高校生枠は、二人。もう一度言う。二人しかない。

一人は僕。もう一人は——不登校中（まだ一週間しか経ってない）。

終わったな、僕の学園生活。

そもそも楽しむつもりもないんだけどな。

学園——学校というのは、僕のPTSDトラウマを思い出してしまふ。

そのトラウマは未だに克服出来てないし、一生影のように付き纏うんだろう。

それこそ、死ぬまで。

しかもそのトラウマのせいで、人と話す事はまだしも、相手に触ったり、触れられたりするのが駄目だ。

入学式初日、せっかく話してきてくれたクラスメイトに触られた瞬間——彼にとっては軽いスキンシップなんだろうが、僕は拒絶してしまった。しかも相手の手を振り払う感じで。

そりゃ、クラスで孤立もするわ。ぼっちにもなるよ。

さっきはこの学園のシステムを言い訳にしてしまったが、何のことはない。自分の所為。自己責任という言葉が当てはまる。

そうこうしてる内に、休み時間が終わる合図の鐘が鳴る。

クラスみんなは、そそくさと自分の席に座る。

そこにタイミングよく先生が現れる。

クラス委員が号令をかける。

「起立。礼」

僕も席から立ち、礼をする。

これが、僕が藤見学園に入学してからの日常。

まだ一週間しか経ってないが、これが三年間続くと僕は思っていた。

何の疑いもなく。

これでは、あの日から何も成長していない。

しかし、成長云々言っても、来るものは来るのだ。

運命なんて言葉、僕はあまり好きではないけれど、運命は僕を気に入っているらしい。

宗教的に言くと、“試練”とでも言うべきか。

僕はこの時、あんな事が起こるとは、毛ほども考えてなかった。

当たり前だ。

あんな事を予期できるのは、それこそ神様ぐらいだろう。
けれど、そんな事は関係無く、来るものは来るのだ。

異変が起こったのは授業が始まって、約二十分が経過した所だ。
何か、悪寒を感じる。

この感じ、二年前と同じだ。

『よくないモノ』を感じる。

理由はよく分からない。この嫌な感じ――。

濁った殺意とでも言えればいいのか。

とても、正気とは思えない。

流石に危機を感じた僕は、先生に早退（本当は逃げ出すため）を
言おうとした瞬間――。

それは教室のスピーカーから放たれた。

『全校生徒・職員に連絡します！ 全校生徒・職員に連絡します！
現在、校内で暴力事件が発生中です』

『生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！』

「何だ何だ」

「マジ？」

「ちょ、何〜」

「ウソだろ」

クラスメイト、いや学年全体がざわざわと騒ぎ始める。

『繰り返します、現在校内で暴力事件が発生中で……』

放送が突如として止んだ。

甲高い音が聞こえる。

そして――。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアア！！』

『あっ』

『助けてくれっ、止めてくれっ』

『たすけっ』

『ひいっ』

『痛い痛い痛い！！』

『助けてっ、死ぬっ』

『ぐわああああ！！』

来るもの来るのだ。

とは言ったけれども。

まさかこんな早く来るとは。

誰か嘘だと言ってくれ。

001 濁った殺意（後書き）

記念すべき第一話です。

ここから全ては始まります。

読んで下さった皆様、ありがとうございます。

誤字脱字やおかしい所、批判、ご意見、ご感想を一言でもいいのでお待ちしています。

002 (前書き)

まだできてないよ。
もう少し待ってね。

002

もう少し待ってね。

[illegible]

002
(後書き)

003 (前書き)

まだ出来てないよ。
もう少し待ってね。

003

まだ出来てないよ。
もう少し待ってね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1966q/>

学園黙示録 弱小人間の物語

2011年10月8日08時08分発行